

装飾バレエとアイデンティティ 〈電気の女神〉は何を表象するのか

古後奈緒子（大阪大学文学研究科）

1. 研究の動機と背景

この研究は、19世紀末の中欧のバレエがいかなる社会層を代表し得たのか、主に「装飾バレエ」と呼ばれる人気作品の表象の分析に基づいて、考察するものである。問いの設定の背景は、1990年代以降の舞踊学の学際的展開における、踊る身体に表象される属性の問い直しに求められる。舞踊史においてもジェンダーやエスニシティに着目した研究が行われるようになり、白人を主な担い手とする西洋中心主義的な舞踊史叙述に作用した力が、批判的に捉え返されてきた。またこの動向は、〈舞台上の舞踊史〉と呼ばれる創作群や、ダンス・アーカイヴへの関心によっても推し進められてきた。これら研究と創作が交互にもたらした成果は、モダニズムの世界舞踊史と舞踊学に作用する諸力を見直し、今日、踊る身体は、制作者と観客などとの関係で主客を争い、複数の属性が競合する場とみなされるようになったと言えるだろう。モデルネの舞踊に関しては、芸術としての地位と権利を希求する過程における位置どりが、イザドラ・ダンカンのマニフェスト『未来の舞踊』などに認められる。本研究は、その中で「民族の」と批判された同時代のバレエの属性の構成を明らかにし、「民族」がいかなる要素により支配的であったのか考察する。

2. メディアとしての装飾バレエ

表象の社会性を問うにあたり、まずは装飾バレエのいくつかの特徴のうち、群舞の大型化と、ジャンルのマスメディア的な機能について確認する。前者に関しては、中欧の装飾バレエにとどまらない同時代の傾向であり、19世紀における学校の整備や劇場の大型化などがその理由として挙げられる。後者に関しては、複数の台本の主題から、この時代のバレエが近代的な意味における芸術ではなく、民族国家の統一、植民地主義、近代主義といった世俗の関心と手を組んだメディアであったことが示される。作品ごとのイデオロギーの偏りは、官立の歌劇場と民営のヴァラエティ劇場が競合する時代にあつて、君主の政治機関から大衆娯楽までの機能の振れ幅と関連している。本研究はそのなか

ら、1880年代にバレエが広告塔の役割を果たした電気の表象に注目し、最新技術の展示と未来像の提示を司る〈電気の女神〉を呼び物とするバレエ『エクセルシオール』(1881)、『パンドラ』(1891)、『プロメテウス』(189?)-を分析の対象とする。

3. 台本の間テクスト的分析

初めに、上記三作の制作における相関関係と、想像界と現実世界が層をなす構成上の共通点が確認される。

次に、上記三作品のソリストの役である〈電気の女神〉の含意を、神話と図像学における系譜、さらに同時代の人気を二分する〈人形〉の系譜との関係において押さえる。先行研究により、それは真実の守護神ヴェリタスと電気の神秘的な表象エーテルの二面性を引き入れた形象であることが指摘されている。さらに主題上は無関係に見える『人形の精』(1888)と照らし合わせることで、〈電気の女神〉にも、機械仕掛けから電気仕掛けへの動力シフトの時代における男性エンジニアの夢の盛衰、つまり一種のピュグマリオンズムが潜在しているという解釈を提出したい。

最後に、個別の台本において群舞の属性を分析し、〈電気の女神〉に相当する役との関係において、台本が提示する社会像について考察する。『エクセルシオール』においては、「人類の偉業」が労働者（群舞）と科学技術者（男性ソリスト）によって具現化され、二人いる電気の女神はその守護者と開発対象の二役を含意する。『パンドラ』においてはバロック劇を参照し、同時代の相当物に置き換えられた領土、富と財の擬人化を群舞が担う。女性スターの役は場面ごとに発展してこれらを統べる役割を担い、男性エンジニアをも凌駕するにいたる。この大胆な神話の書き換えは、ゼウスを雷と火の管理者とする神話に忠実な守旧派の『プロメテウス』と対照される。

以上の分析と時代背景に基づき、装飾バレエが神話の参照とソロとコーラスの二極化により、革命前の社会を模索し集団を組織するメディアであり得たと考えられる。属性という観点からは、群舞は階級を代表しつつも大団円では民族国家が前景化されること、〈電気の女神〉の男性に対する地位の向上が、他の民族国家への支配の拡大と連動していることが示される。以上の台本分析の結果は、今後、振付や受容の具体的な資料にあたり、上演の関係においても検証してゆきたい。